

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2012年の部					
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ					
作者		岩崎純一					
通釈・語釈		園井長光、武田あさゑ、岩崎純一(自釈)					
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/					
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/					
歌集年月日		2012年の歌会・歌合		通釈		語釈	
主催: 岩崎純一		歌数:150首 歌人数:3名 自歌数:25首		『平成小町閑吟和歌』(へいせいこまちかんぎんわか)		他歌人欄	
2012/1/1 出題 2012/1/31 判		恋の和歌二十五首を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判				評	
2012/1/9		類	散る花と恋ふる女の類はつら同じおもてにうらはは泣く胸	散る花と恋する女の類とは、同類である。表面は赤くなり、胸の内では泣いている。	◇掛詞「おもて(表面×顔)」「うら(裏×心境)」 ◇縁語「類、つら、おもて」「うら、胸」		
2012/1/9		首	あながちにとはれし枕首ねぢて月の光はわたす橋姫	強いて逢瀬を求められ、首を横に振って断りながら、月の光は招き入れ、寝床の端から端まで照り渡している女。	◇掛詞「わたす、橋」 ◇参照「首ねぢて、『なんでふ神』と言ひて」(『沙石集』)	◆首をひねって、いやいやをする未承諾の様子は、左記の例のように「首ねづ」と表現され、これを恋歌に取り入れたものである。(園井長光)	
2012/1/9		項	黒髪も人のむかしの言の葉も我が身うなじにかかる面影	うなじを通して我が身に掛かる黒髪のように、あの人の別れの言葉が心に引っかかる。それでも、素敵な面影が今も胸に降りかかる。	◇掛詞「我が身憂(し)×項」「(我が身・うなじに×心)にかかる」 ◇縁語「黒髪、かかる」	◆「うなじにかかる月影」ならば耽美凄麗の至りだが、避けたのはあくまで幻像を優先したからか。いずれにせよ、至妙の艶である。(園井長光)	
2012/1/10		手首	枕言(まくらごと)あだの契りとこぼるむ女(をんな)の手首傷をなしてよ	あなたの甘美な口癖も、儚く壊れる約束でしょうね。そうしたら、私は涙を流すことになるでしょう。今のうちに、こんな女の手首を切って、傷を入れて下さい。	◇掛詞「毀る×零る」	◆「女の手首傷をなしてよ」は、たとえ女性の身に成り変わった代理詠という和歌の特徴を持ってしても、詠むのが怖い、ほとんどあり得ない表現。(園井長光) ◆凄惨なエロス。	
2012/1/10		指	光り増す涙ばかりを形見として心も細き夜半の指金(さしがね)	私はまるで、光の増してゆく涙ばかりを形見として身にまとい、あの人のつれない心に操られ捨てられて、心が細ってしまった、操り人形。			
2012/1/8		髪	黒髪の上り下りの日暮れ坂いくすち通ふ闇をなすらむ	貴方に逢うため、いつもその黒髪のように長い坂を上り下りする日暮れ。宵闇となるまで、何度通ったことでしょうか。この黒髪は、いつまで暗闇を見続けることでしょうか。	◇縁語「黒、暮れ、闇」「髪、すぢ」		
2012/1/10		髪裾	思ひ侘び髪(かみ)の裾まで泣き果てめ枝毛(えぢ)の別れ末は消えつつ	失恋に悩んで、髪(かみ)の先まで泣き果てました。枝毛(えぢ)の別れのように、この先々の成就のあては消えつつ。	◇縁語「髪、裾、枝毛、末」		
2012/1/10		髪状	待てど来ぬ夜の髪状(かみざし)を知るらめや嵐(あらし)ののちの路(みち)のみみち葉(かみ)	待ってもあの人の来ない夜の、私の髪(かみ)の様子をご存知ですか。秋の嵐のあとの、路(みち)に落ちた紅葉(もみぢ)の葉(かみ)のようです。			
2012/1/8		袖	袖(そで)のみちこぼる涙は雪となる白妙(しらたか)ならぬ色(いろ)を染めつつ	紅葉(もみぢ)が袖(そで)に散る。そして、凍ってゆく。涙(なみだ)がこぼれる。そして、雪となる。全てが、白色(しろ)ではない色(いろ)、紅色(にじ)に染まりつつ。	◇掛詞・区割れ「零る(る)×凍る」		
2012/1/9		衿	移り香(うつりか)は人の衿(かみ)まで染み果てめ袂(たもと)さらなるふちと別れて	あなたの移り香(うつりか)は、あなたが別れを告げたこの私の衿(かみ)にまで、涙(なみだ)で染み果てました。袂(たもと)、言うまでもなくもって涙(なみだ)に濡れて、川(かみ)の淵(ふち)のよう	◇掛詞「さらなる(言うまでもない×その上)」		
2012/1/10		湯具	胸(むね)たぎり思(おも)ひは湯具(ゆぐ)の下燃(も)えて浴(ゆ)びし涙(なみだ)に上がるたをや女(め)	恋心(こゝろ)のたぎる胸(むね)。浴室(ゆずり)での浴衣(ゆかり)の湯煙(ゆげ)のように思(おも)いは燃(も)えて、湯浴み(ゆづり)でごまかしながら涙(なみだ)をも浴(ゆ)びる中、風呂(ふろ)を上げる女(め)。			
2012/1/10		湯帷子	白妙(しらたか)の湯殿(ゆどの)にけがる帷子(かたびら)やいつか鏡(かがみ)に紅(あか)き川(かみ)かな	白い湯煙(ゆげ)に満ちた浴室(ゆずり)の女(め)。いつの間にか、鏡(かがみ)に映る浴衣(ゆかり)には、紅涙(べになみだ)の川(かみ)が流れていた。	◇対句「白、湯殿//紅、帷子」		
2012/1/10		帷子	いたづらに湯浴み(ゆづり)のあとの帷子(かたびら)よひらかぬ床(とこ)に片敷(かたづけ)	空しい湯浴み(ゆづり)のあとの、空しい浴衣(ゆかり)よ。浴衣(ゆかり)の前(まへ)をひらくこともない孤独(こどく)な寝床(ねとこ)に、袖(そで)を敷いて寝ます。			
2012/1/10		腰巻	腰細(こしほそ)のすがる契(ちぎ)りの夢(ゆめ)もなしとかで我が身(み)に巻(ま)ける下帯(したおび)	夢(ゆめ)にまで見たあの人(ひと)との約束(やくそく)にすがっても、望(のぞ)みはない。解(と)かないまま、私の腰(こし)に巻(ま)いてある下帯(したおび)です。	◇枕詞「腰細の→すがる」 ◇参照「腰細のすがる娘(むすめ)の」(『万葉』)	◆万葉歌を取り入れた、肉感あふれる一首で、女性が自らの着衣状況を詠むという冷徹な観察眼。	
2012/1/10		蹴纏	恋(こゝろ)の末(すゑ)来(き)ぬ朝戸出(あさどで)の蹴纏(けまと)ひに裾(すそ)のこぼれし人の契(ちぎ)りよ	これが恋(こゝろ)の結末(けつまつ)なのです。あの人(ひと)が来てくれなかった翌朝(あした)、外(そと)に出ようとして転(ころ)びそうになり、破(やぶ)れてしまった私の着物の裾(すそ)のように、破(やぶ)れてしまったあの人(ひと)との約束(やくそく)。	◇序詞「～裾の」		
2012/1/10		蹴回	鳴(な)く鳥(とり)の尾(お)の引(ひ)かれてし後ろ髪(うしろかみ)残(のこ)る思(おも)ひは深(こ)き蹴回(けまわ)し	鳴(な)く鳥(とり)の尾(お)のように長い私の後ろ髪(うしろかみ)。その後ろ髪(うしろかみ)を引(ひ)かれるほど、あなたに思(おも)いは残(のこ)ります。同じく長い私の着物の裾(すそ)のように。	◇「後ろ髪を引かれる」		
2012/1/10		足洗	夏(なつ)の香(か)の古(ふる)かたびらを足洗(あしあらい)ひうつりし恋(こゝろ)の秋風(あきかぜ)ぞ吹(ふ)く	夏(なつ)の間に恋人(こゝろ)の香(か)りが染(ぞ)みついた古い着物の踏み洗(ふみあらい)していると、その香(か)りを移(うつ)り取りつつ秋風(あきかぜ)が吹(ふ)いてゆく。	◇「古かたびらの足洗ひして」(『拾玉集』)		

2012/1/10	身仕舞	恋絶えてまぼろしの夜(よ)のいたづらに我が身仕舞ひはなける鈴の音(ね)	失恋して、幻となったあの人の夜。化粧をしたこの私の身の泣き声、儚く響く鈴の音のように、あとに残るばかりです。	◇参照 「身仕舞ひ済んで鈴の音聞こえ」(『根無草後編』)		
2012/1/10	化粧	梅が香と桜のほひいづれかは女(をんな)の化粧(けはひ)初花染(はつはなぞ)めは	梅の香りと桜の匂いのどちらになぞらえるべきか。恋をし始めた女が化粧をして身も心も整える時の凄麗美は。	◇参照 「くれなゐの初花染めの色深く」(『古今』)	◆梅、桜、女の三種類の色香がすべて込み込んだファンデーションを塗るような、精妙で共感覚的な美。(戸井留子)	
2012/1/10	簪	松にだに簪の枝(え)はあるものなぞ我が髪は乱れ散るらむ	松にさえ簪のような枝はあるのに、どうしてあなたを待つ私の髪は、簪を挿す余裕もなく、このように乱れ散っているのでしょうか。	◇掛詞 「松×待つ」		
2012/1/10	櫛	露かかると黒髪(くろかみ)の小櫛(こくし)をぐしまで流れあまたに宿る月影	自分の涙がかかると黒髪をくしけずっている小さな櫛にまで、多くの涙は流れ始め、そこに月影が宿るほどです。			
2012/1/10	操	由良の旅幾夜なれきて唐衣(からころも)舟と女(をんな)のみさをとだへで	由良の河口あたりを漂流するような、行方知らずの恋の旅を女が始めて、いくつの夜を孤独に過ごし慣れたであろうか。舟の棹も途絶えず漕ぎ続け、女の操も途絶えず着物を脱がないまま。	◇歌枕 「由良」 ◇掛詞 「慣れ来て×慣れ着て」「水棹×操」	◆俗謡の響きだが、どこか上品さを漂わせ、口調もよい。「由良の旅」の初句切れは効果的。(長満たき)	
2012/1/8	涙	我が涙うつる月日の目頭(めがしら)よやがて袂(たもと)に落ちて消えぬ	失恋の月日は流れ続ける。私の目頭は涙に濡れ、瞳には月の光、日の光が映っている。涙はそのまま袂にも落ち、月と日の光を映し、消え草むらに隠れた沼のように、隠れて涙する女の下紐は、氷のように解けない。沼の水は凍り、恋心を秘めたまま、冬は来た。	◇掛詞 「移る×映る」「月日(時間×月と太陽)」		
2012/1/10	水籠	隠れ沼(ぬ)の下紐(したぬい)とけぬ氷(こ)かな水籠(みこも)るままに冬は来	私の顔は、春の若菜のように微笑む笑顔を忘れてしまった。咲く気配も見えない梅の花のように、つらく甲斐もない片思いに。	◇枕詞 「隠れ沼の→下」		
2012/1/10	微笑	我が顔は微笑(ほほゑ)む若菜(わがな)忘れてきかひなき恋の梅の気色(けしき)に		◇掛詞 「恋の憂(し)×梅」		
主催: 岩崎純一	歌数:2首 歌人数:1名 自歌数:2首	『純一無雑艶歌』(じゆんいつつむざつえんか)			評	派生歌
2012/4/22		恋の和歌を詠むこととした。 自撰				
2012/4/22	別恋	まぼろしの遣(や)らずの雨のよその袖帰るさ晴れし忘れがたさ	あなたが帰ってゆく道には遣らずの雨は降っておりませんが、私の袖には涙が落ちていた光景の忘れがたさよ。	◇「遣らずの雨」		
2012/4/22	忍恋	光(ひかり)は折を外(はず)せる我が恋は朧月夜に雪の秋風	機会を外した我が恋は、春の朧月夜に冬の雪の混じった秋の風が吹くようなものだ。目の前の春の月光は、私には明光とは見えなかったの			
主催: 戸井留子	歌数:112首 歌人数:4名 自歌数:24首	『一人二役艶書合』(ひとりふたやくえんしよあはせ)			評	派生歌など
2012/6/15 出題 2012/7/15 判		各歌人が男女両方の艶書歌を詠むこととされた。 出題者:戸井留子 衆議判				
2012/6/17	艶書一	花と恋と一人摺るたび燃え尽きぬ袖と胸に残る煙よ	(男)花を袖に摺りつけすぎて燃え尽き、恋をしては胸が燃え尽きてしまふ。袖と胸に残る煙であるよ。	◇掛詞 「摺る×する」 ◇対句 「花、袖//恋、胸」		
2012/6/17		人恋し心の花を摺り衣摺り切れ果てず頼む白糸	(女)あなたが恋しい。心に咲く花を着物に摺りつけていますが、擦り切れ果てはせず、かろうじて恋の成就を頼みとしてつながる白糸です。	◇序詞 「～摺り衣→摺り切れ」		
2012/6/17	艶書二	小百合花(さゆりばな)ゆり吹き散らす秋風や我が庭のみは夏をとどめよ	(男)小百合の花を吹き散らし、二人の将来をも吹き散らしそうな秋風よ。私の庭にだけは、夏のまま吹かずにお願い。	◇枕詞 「小百合花→ゆり」		
2012/6/17		叶はずは早や秋風に消え果てんこの小百合葉(さゆりば)の心知られで	(女)恋が叶わなかったら、私は早いこと秋風に消え果てましよう。この小百合の葉のようにほかない私の心はあなたに知られないで。			
2012/6/19	艶書三	片思(かたも)ひのよその高嶺(たかね)は朝日にて袂(たもと)に映るまぼろしの花	(男)私が片思いしている貴女を象徴する山の高嶺には、朝日が照っている。袂には、恋の途絶えを暗示する幻の花が咲いている。			
2012/6/19		天つ空高嶺の花はそれながらそなたの袖に照る夕日かな	(女)あなたから見て天上に咲く高嶺の花である私は、どうしようもなくここに居るまま、あなたの袖に照る夕日になって沈むのです。	◇「天つ空」:手の届かない世界		
2012/6/19	艶書四	空蟬(うつせみ)の芦屋(あしや)の螢消えわびぬこころ鵜飼(うかい)ひの恋の漁り火	(男)この世に、芦屋の地の螢の命が消えかねている。私の心もつらい。私の恋心は、闇に放たれる鵜飼ひの漁り火のようだ。	◇枕詞 「空蟬の→(命)」 ◇掛詞 「心憂し×鵜飼ひ」 ◇本歌取 「漁り火の昔の光ほの見えて芦屋の里に飛ぶ螢かな」(良経)		
2012/6/19		漁り火の昔の枕燃え果てぬ今のそなたは鵜飼ひならずや	(女)漁り火のように輝いていた昔の二人の枕は燃え尽きてしまった。今のあなたは鵜飼ひではないのでしょうかね。	◇本歌取 「漁り火の昔の光ほの見えて芦屋の里に飛ぶ螢かな」(良経)		
2012/6/20	艶書五	忘るなよ色なき空の雨落ちてされどかたみにくれなゐの袖	(男)忘れなでくれ。これといった色もない空から雨が落ちて、それにもかかわらずお互いに紅色の涙を流し合った袖を。	◇対句 「色なし、空//くれなゐ、袖」 ◇仏語 「色なき空」:色即是空		
2012/6/20		秋ならで冬の別れぞうらめしきもみちの涙露もまぎれず	(女)秋ではなく冬の別れだからこそ恨めしい。あの秋の紅葉と、紅葉に染まった露に、真っ赤なこの涙を紛れ込ませることができないから。	◇掛詞 「露も(涙も×少しも)」 ◇縁語 「秋、もみち、露」		

2012/6/20	艶書六	白妙の別れの涙こきませず花ともみちの折のあはひに	(男)かつて「白妙の袖の別れ」と歌われたが、真っ赤な二人の涙は混ぜ合わすまい。色づいた桜の春と紅葉の秋の間に夏があるように、二人は別れてゆくのだから。	◇枕詞「白妙の→(袖)」		
2012/6/20		帰るさを返さぬ人を追ひかねて袂の波の忘れがたみよ	(女)今朝を限りに二度とこの帰りを繰り返さないつもりをあなたを追うことができないで、残る私の袂には忘れがたい涙の波が形見として残っています。	◇掛詞「忘れ難み×忘れ形見」		
2012/6/22	艶書七	下思ひつらく憂き世の名取川男の涙夢に流れて	(男)貴女に片思いしている私は、つらく苦しい世の中との名を取る名取川の流れるように、男の涙を流していることだ。	◇歌枕「名取川」 ◇掛詞「つらく憂き世の名取り×名取」		
2012/6/22		憂き身をばしかと宮城の沖の袖あまた名取のそそぎ果てても	(女)宮城の沖の海のような涙を流す、こんなにつらい私の身の上を見て下さい。いくらあなたの涙が名取川のようにそそいでいるとしても。	◇掛詞「しかと見(よ)×宮城」		
2012/6/23	艶書八	たとふるはうぐいすいかに新枕(にひまくら)浮き巢をうばふ我ほととぎす	(男)私を諭えるなら、鶯はどうか。貴女との初夜にやって来た私は、鶯の浮き巢を奪い取るほととぎすのようだ。			
2012/6/23		ほととぎす泣くだけ泣けば飛ぶ鳥の明日のみそらを生きて越ゆ	(女)私がほととぎすです。あなたを待って泣くだけ泣いてきましたから、この飛ぶ鳥のように、明日の空も生きて飛び越えていこう。	◇枕詞「飛ぶ鳥の→明日(香)」		
2012/6/23	艶書九	知るや雨世の花々に降るほどは汝(なれ)皆がらに恋はれたるぞと	(男)雨よ。世の全ての花々にそれほど降るとは、全ての花々から自分が恋われていると知っているからなのか。そんなはずはないだろう。私は、それほどにまで色々な涙は流さない。			
2012/6/23		ひとすぢの今宵の時雨知るらんよ我が花咲かぬ身の袖の雨	(女)今宵の時雨のような、あなたの流すひとすぢの涙が知っているでしょうよ。時雨とは打って変わって、咲けないでいる花のような身の上の私の袖には、涙の雨が激しく降っていることを。			
2012/6/25	艶書十	黒髪待ちならひける夕暮も泣きならひたる今の涙よ	(男)貴女の黒髪のように長い夕暮れに、貴女は私を楽しみに待つことが習慣だったのか。私が行くことのない今は、涙を流して泣くことが習慣になっていったのか。	◇本歌取「あぢきなくつき嵐の声も憂しなど夕暮に待ちならひけむ」(定家)		
2012/6/25		待つ涙待たぬ幾夜も朝涙そのひる間てふ時はいつかは	(女)待つも涙。待たずに寝たつむりの幾夜も、朝には涙。昼にも乾かないこの涙が乾くという時は、いつになったら来るのでしょうか。	◇掛詞「昼×干る」		
2012/6/28	艶書十一	我が胸の恋のみなどをたづぬれば霞に落ちし宇治の橋姫	(男)我が胸の恋心の辿り着いた所を訪ねてみると、霞の奥に消えていった宇治の橋姫のような貴女が見えた。	◇本歌取「暮れてゆく春のみなどは知らねども霞に落つる宇治の柴舟」(寂蓮)		
2012/6/28		そちこちをかたみに春の霞とて宇治の橋姫同じ胸かな	(女)そちとこちらで、お互いにお互いを春の霞の奥だと思っているのです。宇治の橋姫も、同じ胸の思いです。あなたのほうが、霞の奥に消えてゆくように思えます。			
2012/6/30	艶書十二	初瀬かはあまた有明あひ眺めそれも飽かずの我が胸の鐘	(男)多くの有明の月と一緒に眺め、それでも本当は私も飽き足りないうちに聞こえてきた鐘は、初瀬山で鳴ったものであろうか。いや、別れを決めた私の胸の内で鳴ったのだ。	◇頭韻「あまたありあけあひながめ、あかず」		
2012/6/30		たづぬれど昨夜(こそ)もつれなき人に似て託言(かごと)がましき有明の月	(女)尋ねてみても、昨夜も来てくれなかった冷たいあの人に似て、言い訳がましく空に残る有明の月です。			
主催: 岩崎純一	歌数:12首 歌人数:12名 自歌数:1首	『和歌オリンピック2012』				
2012/7/22 出題 2012/8/6~8/12 判		本年開催のロンドンオリンピックに掛けて、和歌オリンピックを行うこととした。投票数の一番多かった歌人から順に金・銀・銅メダルを獲得した。 出題者:岩崎純一 衆議判			評	派生歌など
	◆現代短歌参加者用(「うたのわ」での開催)	左記の特設ページに歌掲載。				
2012/7/22		白妙の雪月花見(ゆきつきはなみ)繰り返し今日も寝るなり敷島の床	真っ白な雪、月、花を年ごとに繰り返し眺めては、今日もまた床に寝ることだ、日本の土地で日本人の私は。	◇枕詞「白妙→雪」 ◇縁語「白妙、繰り返し」敷、床	同率第4位	◆たづね来て見しはやまとの春霞おぼろの空のまたとき月(袴の子)
主催: 袴の子	歌数:7首 歌人数:7名 自歌数:1首	『和歌オリンピック2012 伝統和歌部門』(わかおりんびつく でんとうわかぶもん)				
2012/7/22 出題 2012/8/6~8/12 判		本年開催のロンドンオリンピックに掛けて、和歌オリンピックを行うこととした。投票数の一番多かった歌人から順に金・銀・銅メダルを獲得した。 出題者:岩崎純一 衆議判			評	派生歌など
2012/7/22		昨日今日人の秋津の空の果てに雪月花の色ぞ争ふ	昨今、人々がもう飽きてしまった日本の空のずっと向こうに、四季折々の風物だけは今でも色気を競って遊んでいるのだ。	◇掛詞「飽き×秋」	銀メダル	

主催: 岩崎純一	歌数:8首 歌人数:1名 自歌数:8首	『荒城の月八首』(くわうじやうのつきはつしゆ)				
2012/11/1～11/30		<p>歌曲『荒城の月』に着想を得た和歌を詠んだ。 作詞:土井晩翠 作曲:滝廉太郎 和歌:岩崎純一</p>		評	派生歌など	
2012/11/4	春高樓の花の宴 巡る盃影さして	月影は浮かれし人の心まであだ の宴(うたげ)を巡るものかは	月影が、永遠の栄光を信じて饗宴に浮かれた人間の野暮な心にまで 付き合っ、その人の盃に映ることで一緒に席を巡るような興ざめたも のであるはずがあるうか。			
2012/11/4	千代の松が枝分 け出でし 昔の光今いづこ	青葉とは城より松の心なり昔の 光枝(え)に細くして	青葉とは、青葉城の白くまばゆい栄光よりも、松の真髓のことなので あった。昔の栄光は廃れ、唯一昔のままの月影のみが、枝に細く宿っ ていて。	◇掛詞 「城×白」「青葉(青葉城×青き 葉)」	◆土井晩翠は、伊達正宗が「千代(ちよ・せん だい)」を同音の「仙臺(仙台)」と読み替えた 経緯を踏まえて、「千代」に仙台の青葉城の栄 枯を象徴させたと見られており、さらにこれを 踏まえて当和歌では、「松の青葉」を詠み、同 句の「昔の光」から、「枝に細く」照るものが荒 城の月光であることが判明する仕掛けとなっ	
2012/11/11	秋陣營の霜の色 鳴きゆく雁の数見 せて	凍るとも次ぎて重なる白露の同 じ鳴き音(ね)に雁も数見えず	白露も我が涙もすぐに凍る冬ながら、次から次へと霜の上に落ち重 なって揺れ動くゆえ、私と同じく鳴いている雁の数も、白露や涙の数と 同じく分からない。	◇掛詞 「鳴き×泣き」		
2012/11/11	植うる剣に照り沿 ひし 昔の光今いづこ	朽ち果てし昔の剣(つるぎ)あく がれてまぼろしの虚(そら)を斬 る光かな	朽ち果てた剣が、昔に憧れて、再びさまよい動き出し、まぼろしの虚空 を斬る姿が浮かぶ。			
2012/11/18	今荒城の夜半の 月 変わらぬ光誰がた	夜半の月かへりて心なきよしか 人もろともに光隠れで	夜半の月よ。むしろ心ない存在であるがゆえに、照り続けるのではない か。人間の死と同時に、自らの光を消そうともせず。			
2012/11/18	垣に残るはただ葛 松に歌ふはただ 嵐	葛ほど寂しくもなく嵐ほど激しく もなき松垣の月	葛の色よりは寂しくもなく、嵐の風よりは激しくもない、松垣に照る月よ。	◇参照 「山里に葛はひかかる松垣のひ まなく秋はものぞかなしき」(『曾丹集』)	◆「葛」と「松垣」の組み合わせは、『曾丹集』 の左歌をはじめとして散見され、土井晩翠が これを知っていたかは判然としないが、知っ ていたならば、ここに「嵐」を加え、「松垣」を分け 隔てることで、漢詩的対句の風格を作り上げ たことになる。岩崎氏の歌は、「松垣」を再度 結びつけ、「寂しさ」と「激しさ」とを対句とし、 「寂しさ」と「激しさ」の中間が「月」の情趣であ	
2012/11/25	天上影は変はら ねど 栄枯は移る世の 映さんどてか今も	天照らす光栄(ひかりさか)えを 眺めつつ月影落つる木枯しの道	天上に変わらずあり続ける月を眺めつつ、月の光が照り落ち木枯しの 風が吹き渡る道を歩きゆく。			
2012/11/25	ああ荒城の夜半 の月	人の世も偲ぶ涙も映すとてああ 我が袖の夜半の月影	栄枯盛衰の人の世も、昔を偲ぶ我が涙も、映しているのだ。ああ、我が 袖の涙に映る、荒城の夜半の月影。		◆和歌に「ああ」なる感動詞は伝統技法を逸 脱しているが、極めて意図的な挿入で、この 歌から「荒城の月」を思い起こさない鑑賞はあ り得ないだろう。(園井長光)	